
「おくのほそ道」を歩く

東京～仙台～新潟～大垣
約2,000kmの旅

—古道を中心に—

おさだ とおる

長田 格 Kaku Osada

2022. 10. 06



鏡沼（陰沼） 福島県鏡石町

自己紹介

生まれから

- 1952年、東京生まれ
- 1962年、横浜へ転居
- 1977年、情報科学専攻、ITの会社へ
 - 一貫してソフトウェア開発
 - 歴史に興味なく、勉強したことがない
- 2011年、中国南京に駐在。
 - 1800年前から繁栄と破壊の繰り返し。
 - 歴史を肌を感じ目覚め、勉強開始。
- 2014年、退社し横浜へ。
 - 南京で調べたことを情報発信。

調べる一歩く一書く

- 2015年、電子出版を始める。全12冊
 - 南京シリーズ。4冊。日本、歴史、詩、暮らし
 - 中国旅シリーズ。4冊。
 - 横浜シリーズ。2冊。境界、山
→横浜歴史研究会
- 2022年、紙出版開始。
 - 会報誌「自費出版の革命」

長い歩き+歴史

- 2015年、熊野古道小辺路
- 2017年、四国遍路開始。3年で完了。
- 2020年、おくのほそ道歩き開始。3年



山形県本合海：
最上川下り乗船の地。



山形県立石寺：
芭蕉と曾良の距離



石川県山中温泉：
曾良との別れ。

目次

- 「おくのほそ道」とは
 - 「おくのほそ道」の旅
 - コース
 - 特徴
 - 全貌
 - 主な古道
 - ①～⑨
 - 主要参考文献
 - 付録：名句とその舞台
- 注
 - 写真はすべて私が撮ったもの
 - 地図はすべてgoogle map

「おくのほそ道」とは

芭蕉による俳句まじりの「**紀行文学**」

- 旅 1689（元禄2）年 46歳
 - 5月16日 江戸深川発
 - 10月3日？ 大垣着（全141日？）
 - 10月18日 伊勢に向けて出発（全156日）
- 本
 - 原稿 1691年？
 - 清書の完成 1694（元禄7）年
 - 最初の出版 1699年 or 1702年
- 名前の由来
 - 「奥の大道」：奥州街道
 - 「奥の小道」：多賀城周辺の小道
 - 「俳道の細き一筋の道」の意を含むという説あり
- 松尾宗房
 - 1644（寛永21）年、伊賀上野生まれ
 - 1663年、俳号:宗房(そうぼう)
 - 1672年、江戸へ
 - 1675年頃、俳諧宗匠に。**俳号:桃青**
 - 諸説あり。李白に対応。
 - 1680年、深川に隠居。芭蕉庵。俳号:芭蕉
 - 1684年、初めての俳諧の旅へ
 - 野ざらし紀行、鹿島詣、笈の小文、更科紀行
 - 1694年（元禄7）年10月、大阪に死す

注：日付はすべて新暦換算

「おくのほそ道」冒頭

月日は百代の過客にして、
行きかふ年もまた旅人なり。

月日は永遠の旅人であり、
繰り返していく年もまた旅人である。

→人々は皆旅に生き、死んだ

→私も旅に出よう

「春夜宴桃李園序」冒頭

夫天地者万物之逆旅。

光陰者百代之過客。

而浮生若夢、為歡幾何。

それ天地は、万物の逆旅、

光陰は、百代の過客なり。

而して浮生は夢のごとく、歡びをなすこと幾何ぞ。

天地は万物の宿屋である。

時は永遠の旅人だ。

しかし儚い人生は夢のようで、楽しいこともどれだけのものか。

→だから楽しもう、詩を詠んで酒を飲もう。

「おくのほそ道」の旅：コース



Google map使用

「おくのほそ道」旅の特徴

芭蕉

- 一気に全体を旅した
- 一日に50km程度歩くこともある。
 - かなり速い
- 全部歩くわけではない。
 - 馬、船をかなり利用
- 一か所に長く留まることがある。
 - 俳句の会、休息
 - 最大13泊、栃木県黒羽
- 「おくのほそ道」は実記録ではない。
 - 創作が多い。
 - 実際は曾良の日記による。
 - ただし、山中温泉以降分かれて記録なし

私

- 全体を3回（3年）に分ける
- 一日の歩きの最大は30km少し。
 - 平均25km程度
- 芭蕉が歩かなかつたところは、以下を優先、不可なら歩く、または何か
 - 船なら船、馬ならバス、鉄道
- 芭蕉が歩いたと想定される道を歩く
 - ただし、それほどはこだわらない。
- 一か所に長くは留まらない
 - 宿泊地にこだわらない
 - 市内は自転車中心
- 同じ地点の往復は、片道のみ歩く

「おくのほそ道」を歩く 旅の全貌

第1回 2020年9月1日～21日 東京～日光～黒羽～那須～白河～仙台

第2回 2021年7月1日～30日 仙台～松島～平泉～鶴岡～象潟～新潟

第3回 2022年8月1日～27日 新潟～高岡～金沢～福井～敦賀～大垣

全体 78日 帰着日・最終日を含まず：74日

<芭蕉>

距離	徒歩(平均)	自転車	船	バス	鉄道	計	日	場所	徒歩	馬	船	日	場所
第1回	485 (26)	31	2	24	11	553km	20	19	499	46	8	39	16
第2回	514 (21)	11	23	108	155	810km	29	24	576	94	136	54	25
第3回	470 (20)	28	0.5	44	98	641km	25	23	499	114	28	48	18
計	1469 (22)	70	26	176	264	2004km	74	66	1574	254	172	141	59

注) コース外の宿との往復、市内観光の細かいもの等は除外。
場所数は宿泊した場所の数で、場所数 = 歩いた日数。平均は場所数を分母とした。

総距離

- 600里、約2400km
 - ほとんどの書籍
 - ただし、根拠なし
- 450里、約1800km
 - 金森敦子：450里、1800km
 - 曾良の記録の積算 + a
 - ただし、月山往復等抜けあり
 - 下川裕治：1800km台
 - 自分の旅した記録1612kmからの推測
 - 萩原恭男：476里、1900km
 - かなり正確、細かい抜けあり
- 500里、約2000km
 - 長田 格

テーマの候補

- 俳句とその舞台
- 旅の面白い部分
- 旅の知られていない部分
 - 船旅
 - 登山
- 句碑巡り
- 「おくのほそ道」と中国語
- 古道
 - →旅と歴史の両方にかかわる

主な古道

- ほとんどは国道・県道歩きだが、
- 意外に古道も多く、楽しめる

Google map使用

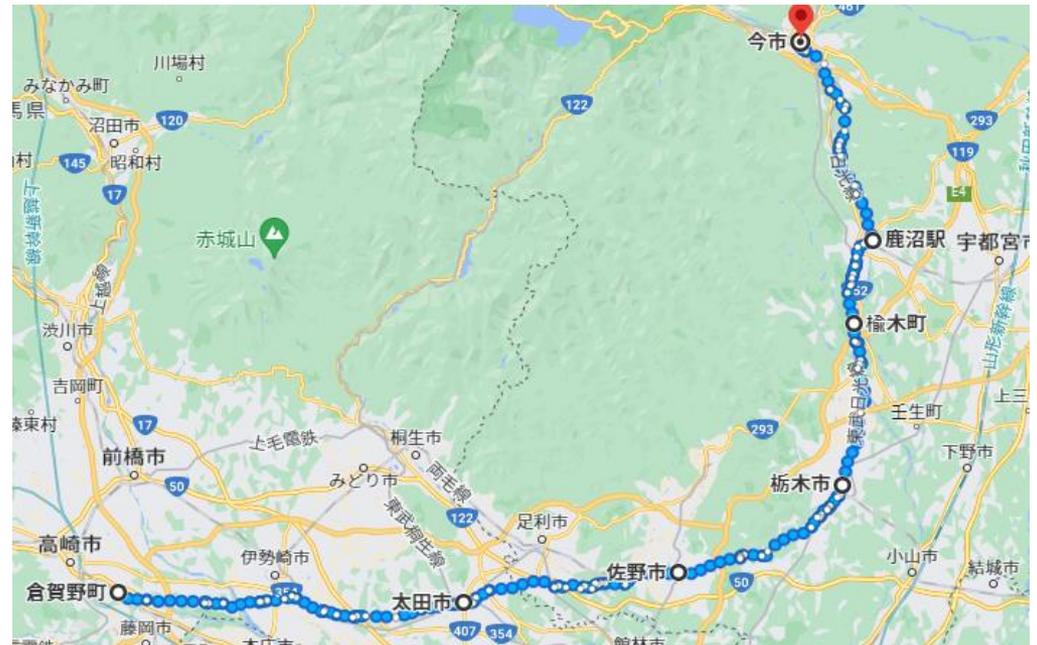
古道：旧道のうちの舗装されていない部分。
気分としては、昔の道がそのまま残っているもの。
石畳、石段はOK。
旧道：昔（江戸時代以前）の道。昔の道がルートそのままであっても、拡張がなされている部分は除く。

「おくのほそ道」本文
(私の注)



①日光例幣使街道

- 中山道倉賀野宿（現高崎市）から
- 日光街道今市宿（現日光市）まで
- 約120km。1646(正保3)年から。
- 例幣使：毎年朝廷から伊勢神宮、日光東照宮へ幣帛(へいはく)を奉納する勅使
 - 京から中山道を通り、倉賀野から日光例幣使街道にて、今市から日光街道へ
- 日光杉並木：日光東照宮の参道並木。川越城主の松平正綱・正信親子が1625(寛永2)年から20数年かけて、杉を植栽して寄進したもの。約5万本。下記3街道にまたがり、全延長35.4kmで、「世界最長の並木道」
 - 日光街道：今市から日光手前まで、16.5km
 - 例幣使街道：今市の手前、13.2km
 - 会津西街道：会津若松～日光の130kmのうち5.7km
- 古道が残るのは、今市の手前、数km。杉並木区間のうちのごく一部。



Google map使用

① 日光例幣使街道：おくのほそ道

- 芭蕉：壬生から楡木で、この道にでて、今市まで歩いた。本文では何も言及せず。

「あらたふと青葉若葉の日の光」

(このあたりからヒントを得た可能性あり)

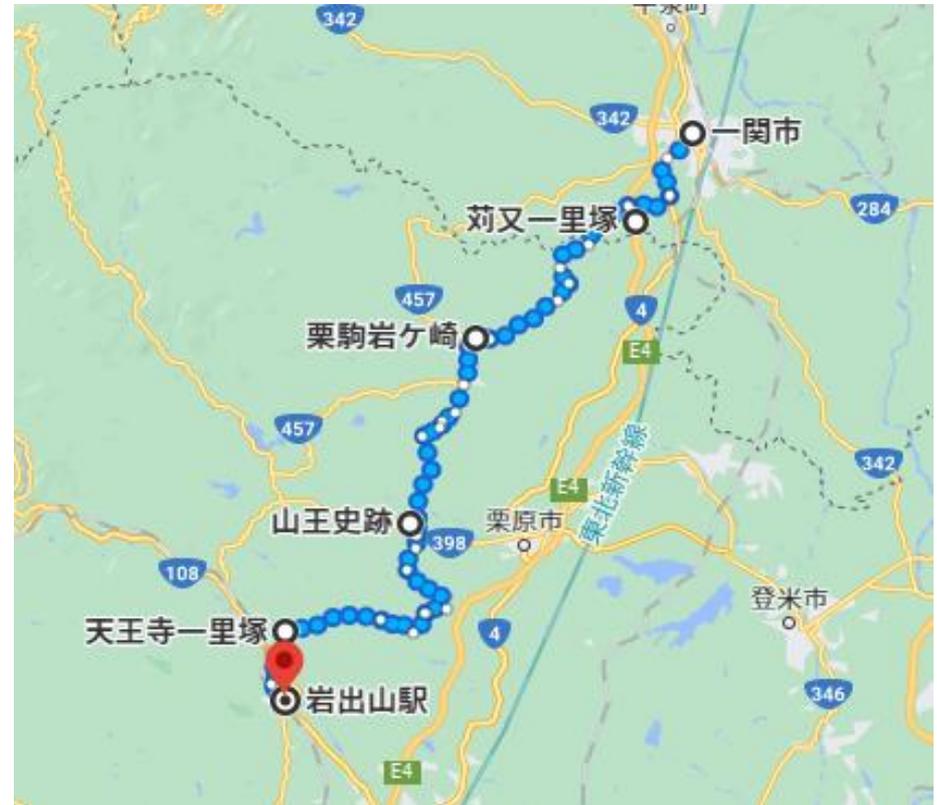
- 私：芭蕉同様。素晴らしい道（もっと長いといい）。舗装されているが、杉並木の保存のため、車を通行止めになっている部分がある。



杉並木部分。右側に車道が走る。

②陸奥（奥州）上街道、迫街道

- 奥州街道一関から
- 出羽仙台街道岩出山まで
- 約50km
- 岩手県部分は迫街道と呼ぶ。ただし、「迫」は宮城県側の地名。「迫」へ行く道という意味か。
- 全体としては、陸奥（奥州）上街道で、奥州街道と並行している。その北側という意味で「上街道」
- 昔は「松山道」とも言われ、源頼朝が奥州征伐の時、この道を通った。（『吾妻鏡』）
- 古道は、岩手県側のほぼ全体と、宮城県側に断続的に残っている。古道部分の合計は約10km程度。



Google map使用

②陸奥上街道：おくのほそ道

南部道遥かに見やりて、岩手の里に泊まる。

(南部道は、南部藩の方へ行く道の意、反対方向へ行くということ。)

- 芭蕉：このルートの全体を一日で歩いた。とてつもない健脚である。ただし、何の記述もない。
 - 芭蕉衣掛けの松の切り株だけ残っている。
- 私：ここを2日かけて歩いた。とてもよく整備された部分と、そうでもなく、道がわかりにくい部分とが混在している。



苅又一里塚：1650年頃築造。二基一対でほぼ完形



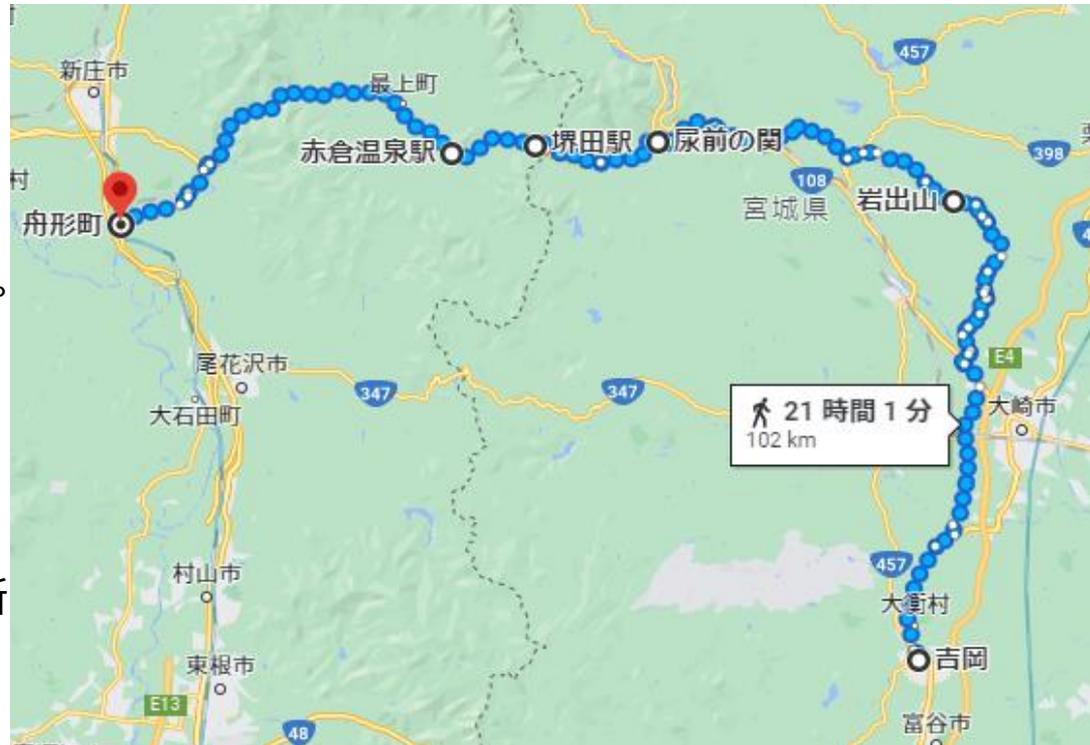
芭蕉衣掛けの松



千本松長根：約1500mの尾根に松並木が続く。戦時中に伐採され、再植林。

③出羽仙台街道

- 奥州街道吉岡宿（現宮城県大和町）から
- 羽州街道舟形宿（現山形県舟形町）まで
- ほぼ現在の陸羽東線沿い、約90km。
- 宮城県部分は羽後街道、
- 山形県部分は北羽前街道とも呼ばれる。
- 古道は、尿前の関から堺田の封人の家まで、中山峠（県境）付近など断続的に約10km、整備され、「出羽仙台街道中山越」とされる。



Google map使用

③ 出羽仙台街道：おくのほそ道

- 芭蕉：岩出山宿から堺田、赤倉温泉分岐まで、この道を歩いた。途中、尿前の関、中山峠を越えて、堺田で2泊し、尾花沢へ向かった。
- 私：鳴子温泉に2泊、赤倉温泉に宿泊。現在、岩出山に宿はない。

小黒崎、みづの小島を過ぎて、鳴子の湯より尿前の関にかかりて、出羽の国に越えんとす。この道旅人まれなる所なれば、関守に怪しめられて、やうやうとして関を越す。



尿前の関：寛文10（1670）年、伊達藩が設置



中山越：沢越えもある。

<尿前の由来：諸説あり>

- 源義経が出羽から平泉に逃れる途中、亀割峠（新庄と舟形の間）で生まれた亀若丸が、この地で初めて尿をした。なお、この近くの鳴子は、ここで初めて泣いたから。
- アイヌ語：シトマエ。尾根が連なっているところ。
- アイヌ語：シュツオマイ。山裾の場所。

大山を登って日すでに暮れれば、
封人の家を見かけて宿りを求む。三
日風雨荒れて、よしなき山中に逗留
す。

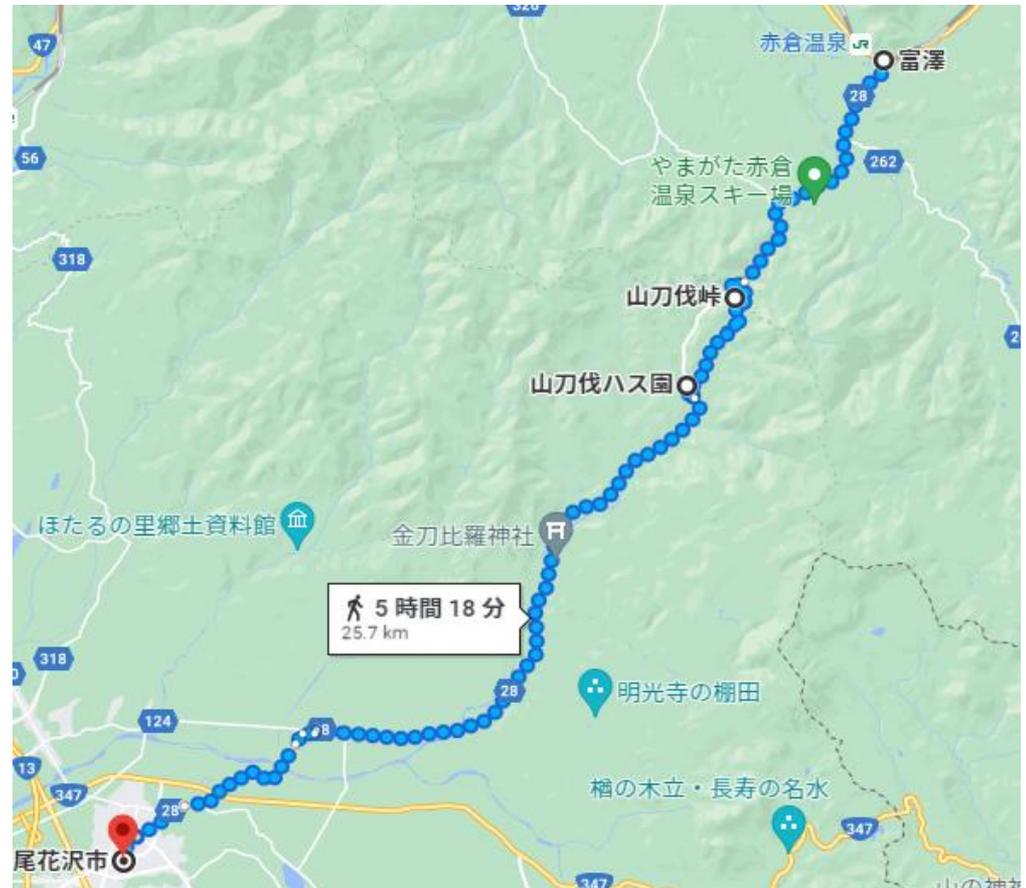
蚤虱馬の尿(ばり)する枕もと



邦人の家：国境を守る役人の家。江戸
初期の創建。芭蕉が泊まったとされる。

④山刀伐峠越え

- 出羽仙台街道笹森から
- 羽州街道尾花沢まで
- 現在の県道28号線。約25km。
- そのうち、赤倉温泉の先、山刀伐峠前後に約3kmほど古道が残っている。
- 山刀伐峠：山形県最上町と尾花沢市の中の峠。標高390m。峠の形状が山仕事で使う「なたぎり」という被り物に似ているから。俗説として、なたを持った山賊が住み着いて、旅行者の身ぐるみを剥ぐという。



Google map使用

④山刀伐峠：おくのほそ道

- 芭蕉：危ないと言われ、屈強な若者に先導を頼み、登った。技巧を凝らした文章で、詳しく記述している。
- 私：登り始めて20分ほどで頂上、その後県道まで1時間ほどかかった。芭蕉の表現するほど大変ではない。距離も短い。



二十七曲り：赤倉温泉側



頂上の記念碑：おくのほそ道本文を記す

高山森々として、一鳥声聞かず、木の下闇茂り合ひて、夜行くがごとし。

（王安石「一鳥不啼山更幽」一鳥啼かず山更に幽なり）

雲端につちふる心地して、篠の中踏み分け踏み分け、水を渡り、岩に躓いて、肌冷たき汗を流して最上の庄に出づ。

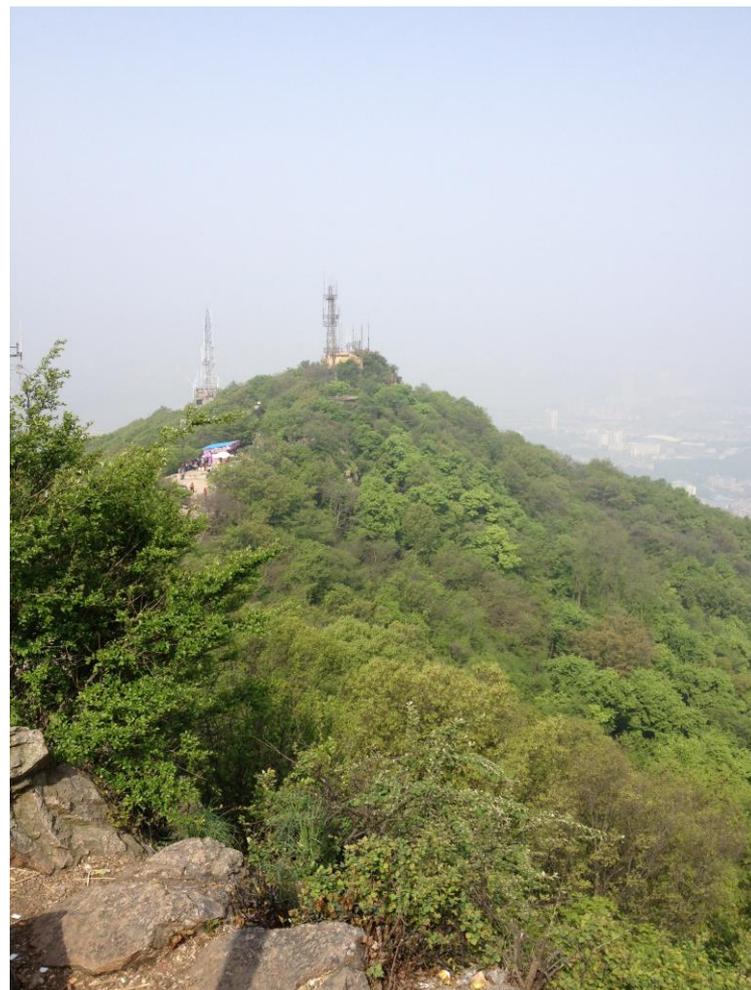
（杜甫「已入風磴霾雲端」已に風磴に入れば雲端に霾る）

鐘山即事（1080頃）王安石（1021-1086）

澗水無声繞竹流，
竹西花草弄晴柔。
茅簷相對坐終日，
一鳥不鳴山更幽。

澗水声無く竹を繞って流れ、
竹西の花草 春柔を弄す。
茅簷(ぼうえん)相對して 坐すること終日、
一鳥啼かず 山更に幽なり。

谷間の水は音も無く竹林をめぐって流れ、
竹林の西には草花が春の柔らかな日差しの中でゆれている。
茅葺きの庵で鍾山と向かい合い一日中座っていると、
鳥の鳴き声一つせず、山はいよいよ静まり返っている。



紫金山（鐘山、蔣山）448m

⑤羽黒山参道

- 隨身門から三山神社まで
- 約1.7km、全部、石段2,466段
 - 1648年から13年かけて造られた
- コースタイムは登り70分、下り60分。
- 標高414m
- 出羽三山神社
 - 593(推古天皇元)年、蜂子皇子が建てた。羽黒山で現世利益、月山で死後を体験、湯殿山で生まれ変わるとする。
 - 蜂子皇子：？-641(舒明天皇13)年。崇峻天皇の第三皇子。蘇我馬子によって父、天皇を殺され、逃げた。人々の多くの苦悩を取り除いたことから、能徐大師と呼ばれる。



Google map使用

⑤羽黒山参道：おくのほそ道

- 芭蕉：南谷に三泊×2滞在。南谷は、中腹より少し上の三の坂より10分程度。出羽三山の由来を含めて、詳細に記述。
- 私：麓の旅館に二泊。往復した。南谷往復含めてほぼ一日ゆっくり。



南谷別院跡



羽黒山頂上、三神合祭殿

六月三日、羽黒山に登る。図司佐吉という者を尋ねて、別当代会覚阿闍梨に問す。南谷別院に宿して、憐愍の情けこまやかにあるじせらる。

四日、本坊において俳諧興行。

ありがたや雪をかをらす
南谷

五日、権現に詣づ。当山開闢 能徐大師は、…



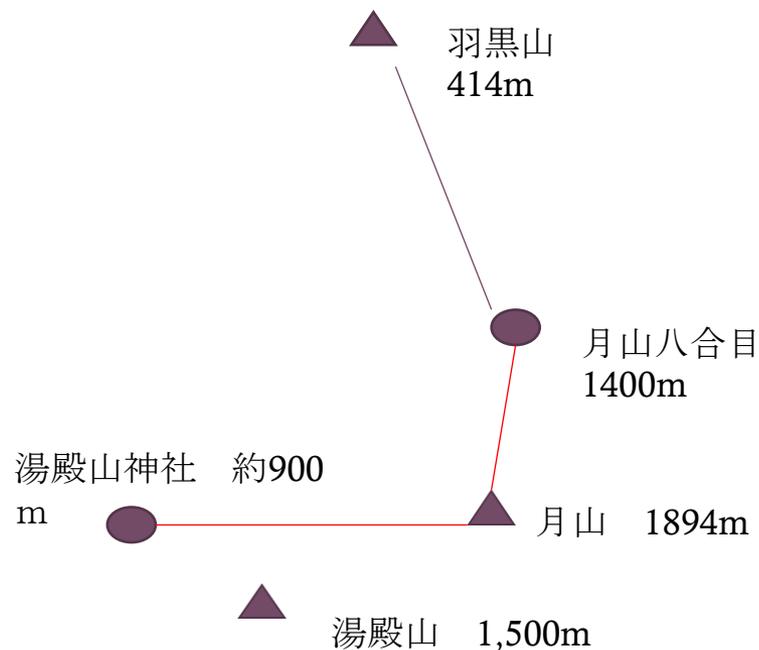
五重塔、国宝、平将門創建、1372年再建



石段 延々と続く

⑥月山湯殿山神社縦走路

- 羽黒山から月山を経て湯殿山神社まで、本格登山
- 湯殿山へは登る道はない
- 羽黒山から月山八合目まで、夏はバスあり
- コースタイム
 - 月山八合目→頂上 3時間
 - 頂上→湯殿山神社 2時間40分



⑥月山湯殿山神社縦走路：おくのほそ道

- 芭蕉：羽黒山から7合目（馬返し）まで馬で、月山頂上の小屋に1泊。翌日、湯殿山神社まで下り、登り返し、4合目まで下る。迎えにより馬で羽黒山まで。かなりきつい。4合目までで現在のコースタイムで11時間以上。
 - 詳細に記述。ただし、湯殿山神社については、語ってはならない。
- 私：8合目から月山頂上を経由し、湯殿山神社へ下り、そこからバスで鶴岡へ。
 - バスの本数が減り、頂上に泊まるのに良い時間のものがない

六日、月山に登る。木綿しめ身に引きかけ、宝冠に頭を包み、強力といふものに導かれて、雲霧山気の中に氷雪を踏みて登ること八里、。。。頂上に至れば、日没して月顕る。笹を敷き、篠を枕として、臥して明るるを待つ。日出て雲消ゆれば、湯殿に下る。

。。。

総じてこの山中の微細、行者の法式として他言することを禁ず。よって筆をとどめて記さず。

坊に帰れば、阿闍梨の求めによりて、三山巡礼の句句、短冊に書く。

涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峰いくつづくれて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山銭踏む道の涙かな（曾良）



月山頂上。残雪



湯殿山神社大鳥居

⑦羽州浜街道

- 鼠ヶ関（山形県鶴岡市）から酒田を
経由し
- 久保田宿（秋田県秋田市、羽州街
道）まで
- 山形県、秋田県の沿岸部を通る。現
在の国道7号、112号に相当。
- 約160km
- 吹浦（山形県遊佐町、酒田の北）
と金浦（秋田県にかほ市、象潟の
南）の間にある三崎峠付近に古道が
残る。約2kmほど。



Google map使用

⑦羽州浜街道：おくのほそ道

- 芭蕉：この街道のうち、約半分、象潟～鼠ヶ関の範囲を歩いた。
 - 酒田から吹浦宿で一泊し、三崎峠を經由し、象潟まで。かなり苦労したことを記述。（帰りはおそらく船）
 - 酒田から、大山、温海、鼠ヶ関。酒田以降、新潟の市振まで、鼠ヶ関の地名以外、何も記していない。疲労困憊、持病のためという。
- 私：ほぼ同様の道を歩いた。
 - ただし、磯の道は残っていない。

酒田の港より東北のかた、山を越え、磯を伝ひ、いさごを踏みて、その際十里、日陰やや傾くころ、潮風真砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。



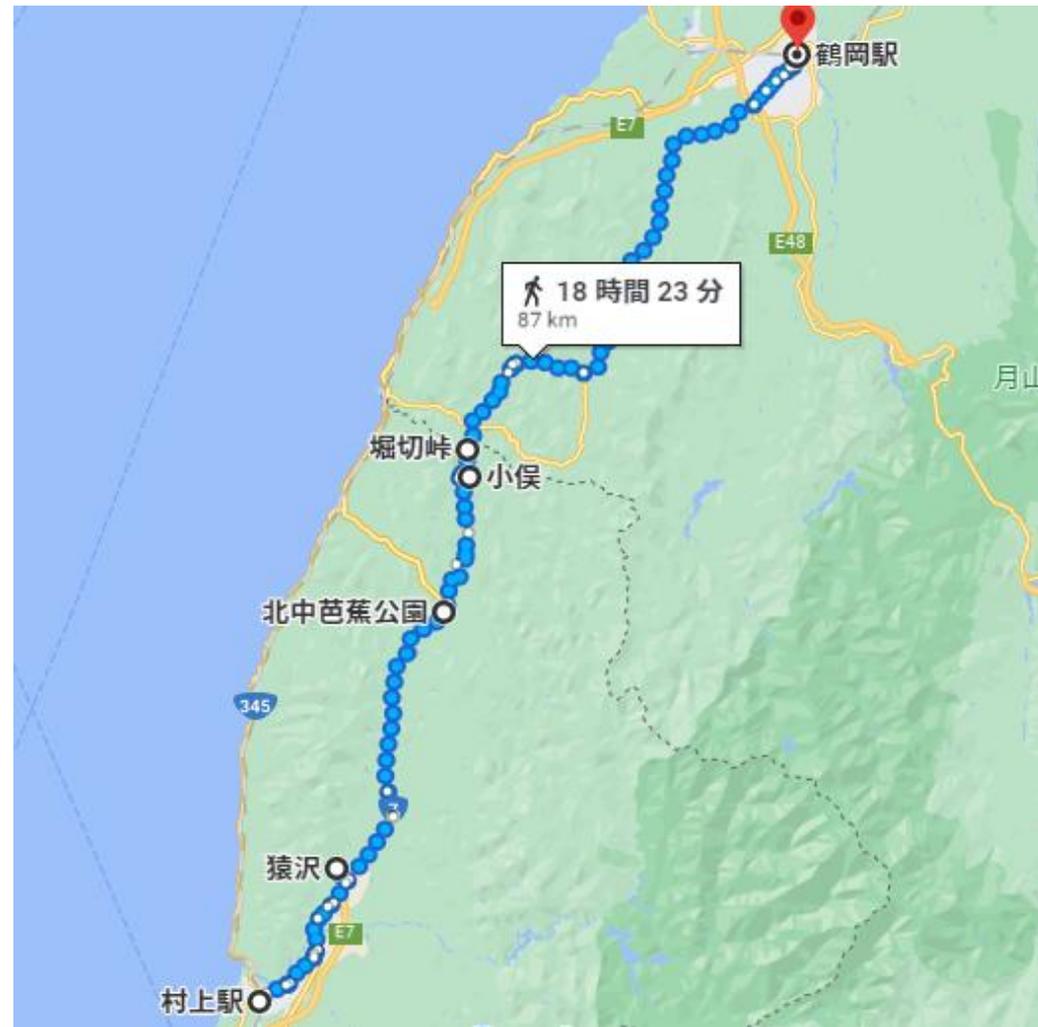
三崎峠



大師堂：慈覚大師が草庵を結んだ。貞観(859-77)年間。

⑧ 出羽街道

- 村上（新潟県）から
- 鶴岡（山形県）まで
- 並行して海側を通る道があり、内陸を通るため、出羽街道山通りとも呼ばれる。
- 約90km
- 古道が残るのは大沢峠付近。「峠の石畳」と呼ばれ、「日本の歩きたくなる道500選」に入っている。数km。



Google map使用

⑧ 出羽街道：おくのほそ道

- 芭蕉：温海で曾良と別れ、海側を一人で進み、勝木から陸に入り、中村（現在の北中）で宿泊。曾良とここで落ちあい、この道を村上まで歩いた。このあたりの記述はない。
- 私：北中には現在、宿がない。芭蕉は勝木周辺は馬を使ったと見られていることから、勝木に泊まり、バスで北中へ出て、そこから猿沢まで歩き、泊まった。古道部分は1時間ほど。



吉祥清水：登り口近く。「平成の名水百選」



「芭蕉が歩いた大沢峠石畳古道」

⑨北陸道

- 高田（新潟県）から
- 中山道鳥居本宿（滋賀県彦根市）まで
- 北國街道とも呼ぶ（現地ではほぼ北國街道と呼んでいる）
 - 狭い意味の北國街道は、追分（軽井沢）から直江津まで
- 約360km
- 古道は、以下の3つの峠に残る。
 - 倶利伽羅峠：高岡－金沢間
 - 湯尾峠：武生－今庄間
 - 木の芽峠：今庄－敦賀間



Google map使用

⑨北陸道：おくのほそ道

- 芭蕉：北陸道の大半を、今庄までそのまま歩いた。
 - 永平寺で寄り道をしている。
 - 今庄からは敦賀へそれた。
 - 敦賀から木之本へでて、その後北國脇往還を通り、関が原へ。
 - 関が原から中山道、美濃街道を通り、終着大垣へ。
- 残念ながら、3つの峠などに関しては、記述は一切ない。
- 私：ほぼ芭蕉のとおり歩いた。

⑨北陸道：倶利伽羅峠

- 富山県小矢部市石動と石川県津幡との境。標高277m
- 8世紀初めには切りひらかれ、江戸時代前田藩の参勤交代用に拡張、整備された。
- 約13kmが歴史国道として整備され、ハイキングコースとなっている。ただし、舗装されている部分が多く、本当に古道と言える部分は1,2km程度。
- 倶利伽羅峠の戦い 1183(寿永2)年6月2日
 - 東の源義仲(3万) 対 西の平維盛(7万)
 - 火牛の計により義仲の勝ち
 - 中国の戦国時代、斉の田単が燕を破った
- 芭蕉：高岡・金沢間は体調不良だったため、ずっと馬に乗ったといわれ、短時間で通過している。このため、源平好きにもかかわらず、地名のみ
- 私：全体を歩いて通った。しかし、もう観光地である。約3時間。

卯の花山、倶利伽羅峠を越えて、金沢は
(卯の花山は、倶利伽羅峠を含む山を指す)



火牛



古道部分

⑨北陸道：湯尾峠

- 福井県南越前町の湯尾と今庄の間。標高：約200m。
- 古代より北陸道の要衝。
- 源義仲が一時、陣を置いたが、撤退した。（倶利伽羅峠の戦いの直前）。
- 約2km、登山道として整備されている。
- 芭蕉：歩いた。名前をそのまま出している。
- 私：約50分で通過。今庄側は多少荒れていて、迷う部分もある。



峠道：湯尾側

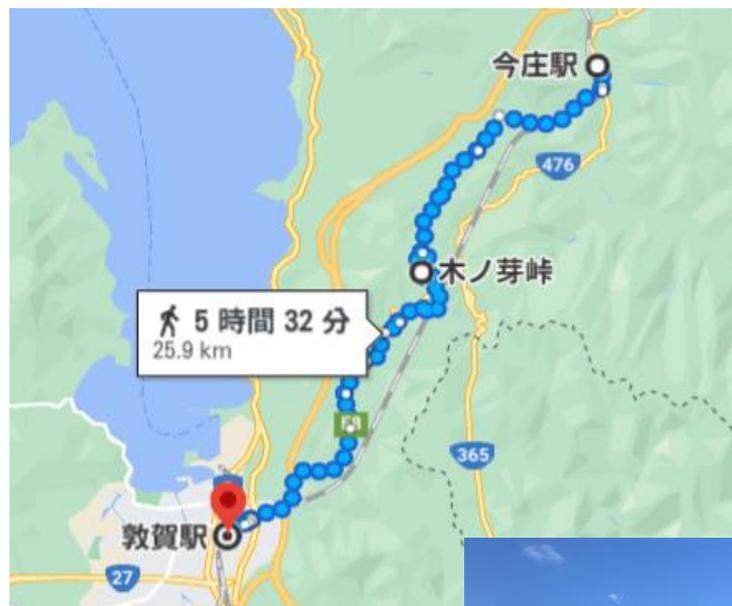
鶯の関を過ぎて、湯尾峠を越ゆれば、燧が城、
(鶯の関は、関所跡、歌枕、芭蕉の頃はもうない)
(燧が城は、義仲の武将が築いたもの、敗けた)



頂上：広い。茶店があった。芭蕉句碑もある。
「月に名を包みかねてや疱瘡(いも)の神」
湯尾峠には、疱瘡予防の神がいて、疱瘡除けの土産を売っていた。十五夜の夜、芋を食う風習から、詠んだ。

⑨北陸道：木の芽峠

- 福井県と南越前町の間。標高628m。
 - 福井県の嶺北と嶺南を分ける
- 830(天長7)年に北陸道の一部として開かれた。
 - それまでは、北の山中峠を通った。
 - 11,2世紀には、東の栃の木峠に北陸道は移動。ただし、直接木之本に向かう。
- 新田義貞軍が雪中の峠越えで、多数の凍死者を出したとされる。
- 芭蕉：敦賀にでたいため、この道を通ったとされる。ただし、山中峠説も否定はできない。また、何も触れていない。
- 私：歩けず。南今庄からJR利用。無念。
 - 2022年8月5日の大雨で、鹿蒜川が氾濫、各種道路不通に。



Google map使用

燧が城、帰山に初雁を聞きて、
(帰山はこの付近一帯の山)



鹿蒜川と帰山

主要参考文献

• 原典

- おくのほそ道（全） 角川ソフィア文庫
- 新版 おくのほそ道 穎原退蔵他訳注 角川ソフィア文庫
 - 曾良随行日記付き
- 芭蕉 おくのほそ道 萩原恭男校注 岩波文庫
 - 付 曾良旅日記 奥細道菅菰抄
- 芭蕉全句集 現代語訳付
 - 雲英末雄、佐藤勝明訳 角川ソフィア文庫

• 研究書、ガイド

- 「おくのほそ道」の旅 金森敦子 角川書店
 - この本に大きく依存
- おくのほそ道探訪事典 工藤寛正 東京堂出版

• その他

- 芭蕉はどんな旅をしたのか 金森敦子 晶文社
- 「曾良旅日記」を読む 金森敦子 法政大学出版社
- 奥の細道 なぞふしぎ旅(上)(下)山本鉦太郎 新人物往来社
- 図説 江戸の芭蕉を歩く 工藤寛正 河出書房新社
- 芭蕉 奥の細道 日本の旅人6 安東次男 淡交社
- 芭蕉紀行 嵐山光三郎 新潮文庫
- おくのほそ道を旅しよう 田辺聖子 角川文庫
- 「おくのほそ道」をたどる旅 下川裕治 平凡社新書
- 日本の街道ハンドブック 三省堂
- 奥の細道の旅ハンドブック 三省堂
- 句碑を訪ねて六百里 赤羽正業 文芸社
- おくのほそ道を歩く 田口恵子 歴史春秋社
- 『おくのほそ道』解釈事典 堀切実編 東京堂出版
- 奥の細道新解 中野博之 新搭社

付録：名句とその舞台

日光：あらたふと青葉若葉の日の光

- 往昔、この御山を「二荒山」と書きしを、空海大師開基の時、「日光」と改めたまふ。千歳未来を悟りたまふにや、今この御光一天にかかやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穩やかなり。なほ憚り多くて、筆をさし置きぬ。

含満が淵：大谷川における小溪谷。男体山から噴出した溶岩によってできた。約200m続く。70体の並び地蔵もある。



平泉：夏草や兵どもが夢の跡

- まず高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。（略）さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落としはべりぬ。
 - 杜甫 春望「国破山河在、城春草木深」
国破れて山河在り、城春にして草木深し

高館より北上川、東稲山：義経の館があり、自決した場所でもあるが、義経については、芭蕉は何も言及していない。



平泉中尊寺：五月雨の降り残してや光堂

- 経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽廃空虚の叢となるべきを、四面新たに囲みて、薨を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

- 三将：文殊菩薩、優填王、善財童子
(芭蕉勘違い)
- 三代：藤原清衡、基衡、秀衡
- 三尊：阿弥陀如来、勢至菩薩、観世音菩薩

850年 円仁により中尊寺開山
1124年 金色堂建立
1189年 藤原氏滅亡
1288年 鎌倉幕府覆堂設置
1962年 新覆堂



立石寺（山寺）：閑かさや岩にしみ入る蝉の声

- 岩に巖を重ねて山とし、松柏年旧り、土石老いて苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞こえず。岸を巡り、岩を這ひて、仏閣を拝し、佳景寂寞として澄みゆくのみおぼゆ。



860年 円仁開基

1689年7月13日 芭蕉

2021年7月21日 蝉の声聞けず

最上川：五月雨を集めて早し最上川

- 最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。碁点・隼などいふ恐ろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を降す。これに稲つみたるをや、稲船といふならし。白糸の滝は青葉の隙々に落ちて、仙人掌、岸に臨みて立つ。水みなぎつて舟危うし。



2021.07.15 梅雨明け直後で、
どんな急流かと期待したが。

象潟：象潟や雨に西施がねぶの花

- 江の縦横一里ばかり、倂(おもかげ)松島に通ひて、また異なり。松島は笑ふがごとく、象潟は憾むがごとし。寂しさに悲しみを加えて、地勢魂を悩ますに似たり。
 - 西施：中国を代表する美人。紀元前5世紀頃。越王勾踐が、復讐の策謀として、呉王夫差に献上した。表情から陰のある美女として有名。
 - ねぶの花：合歓の花。マメ科の落葉高木で、羽状の葉が夕暮れや雨の時、閉じて垂れ、眠ったように見える。

前466年：鳥海山噴火により潟湖
1688年8月1日：芭蕉
1804年：象潟地震により海底隆起
2021年7月21日：私



出雲崎：荒海や佐渡に横たふ天の河

<記述なし>

・ここ間九日、暑湿の勞に神を悩
まし、病おこりて事を記さず。

名句に名文あり
ただし例外がこの一句
「銀河の序」という別の文が
あり、この句が添えられている。



柏崎付近より佐渡島

日本歴史旅①
「おくのほそ道」を歩く
—その1 東京深川から仙台—



長田 格 Kaku Osada
第1版 2021.02.15

日本歴史旅②
「おくのほそ道」を歩く
—その2 仙台から新潟—



長田 格 Kaku Osada
第1版 2021.12.30

人知れず
販売中

電子版
紙版
カラー版

日本歴史旅③
「おくのほそ道」を歩く
—その3 新潟から大垣—

2022年末刊行予定

ありがとうございました

長田 格 kaku.Osada@nifty.com